木下杢太郎のエジプト旅行
――東西文明の源泉の探究へ――

西　田　昌　之

1. 序論

明治の文豪森鴎外に師事し、耽美派の詩人であるとともに、医師として知られる木下杢太郎（本名太田正雄、1885–1945）（写真 1）は、1921 年から 1924 年までのアメリカ、欧州への医学留学の折に、1923 年 1 月、実業家原善一郎、哲学者阿部次郎、日本画家小林古径、前田青邨らとともに 2 週間ほどエジプトを訪問している。このエジプト旅行の経験は、のちに木下自身が東西文明の源泉を理解するための思想的契機となったと回想している。しかし、木下の思想形成における、このエジプトへの旅の意味はいくつかの研究によって取り上げられてはいるものの十分な研究はまだなされていない。

写真 1：木下杢太郎（太田正雄）[1)]

そこで本論では、木下のエジプト関連著作と同行の阿部次郎の著作などの分析を中心に、木下が日本文明の発展のために、自民族中心主義を否定し、客観的に東西文明の根源を探究する重要性を主張するようになった、その理論的枠組みの形成の経緯について論じる。具体的には、まず日記や手紙から、エジプトへ向かう以前の木下の東西両文明に関する思想形成について論じる。次にエジプト旅行について解説したあとで、木下と阿部のエジプトについての日記や随筆を比較することで、両文明の源泉としてエジプト文明を見つめる木下の視点を明らかにする。そして最後に日本を世界文明に貢献する独創性を持った文明とするために、エジプトを東西文明の源泉を理解するための鍵として利用してゆく木下の主張を考察する。

2. 詩人木下杢太郎と医師太田正雄

木下にはふたつの顔がある。詩人、劇作家、随筆家として多彩な文芸活動を行っていた作家木下杢太郎としての顔と、皮膚科学教授太田正雄としての顔である。特に作家としての木下は、耽美派の詩人としてよく知られている。木下は森鴎外に師事する中で、北原白秋、与謝野鉄幹、晶子らと知己となり、『明星』、『スバル』などに作品を掲載するようになった。その後、「パンの会」の創設メンバーとして『食後の唄』、『地下一尺集』といった代表作を世に出していった。その後、南満州に渡ってからは、詩作よりも随筆や紀行文や歴史学研究に関心を変え、キリシタン研究、東西文明の美学論や文明論などを執筆した。

医学分野では、東京帝国大学医学部を卒業後、満州の南満医学堂教授として勤務した。その後、退職してアメリカ・フランスで医学留学を経て、帰国後に愛知医科大学、東北大学医学部を歴任した。最終的には東京大学医学部皮膚科教授となり、皮膚病の基礎研究に寄与した。

木下という人物についての研究及び評伝、作品解説などは、友人や親類など多くの人々によって書かれているが、まず早い時期の評伝としては杉山二郎の研究がある。木下の生涯全般に対して分析された大著であり、実に詳細に網羅された内容となっている[2)]。また木下に関する研究では、主に作家として活躍した前半生を中心に描かれるものが多く、文芸評論家の野田宇太郎もまた作家木下の生涯に注目している[3)]。

一方で、木下杢太郎のように作家でもあり、医師でもある加藤周一は、同様の境遇にあった木下に大きな興味を寄せて、木下の医者としての意識と作家としての意識の統合的理解を試みており、他の研究とは一線を画する。加藤は「木下杢太郎の方法」、「木下杢太郎とシナ医学」、「鴎外・茂吉・杢太郎」など木下杢太郎に関連する論文を執筆している[4)]。さらに岩阪恵子の評伝『わたしの木下杢太郎』でも、この加藤の問題意識を受けたうえで、木下の医学者としての生きざまと作家としての生きざまを連結させて、相互の関連性をうまく描きだしている[5)]。

また木下は数多くの日記や手紙を残しており、この日記の研究に関しては、ドナルド・キーン「木下杢太郎日記」や福田秀一「木下杢太郎（太田正雄）『欧米日記』の成立―文人学者の留学日記　大正篇二―」及び「木下杢太郎（太田正雄）の留学日記」があり、日記の内容について詳細な分析が行われている[6)]。

また本研究でテーマとする留学前後の東西文明論の研究については、菅原潤『旅する木下杢太郎／太田正雄』に詳しい[7)]。海外経験が木下の思想形成に与えた影響について論じており、本稿の問題意識に非常に近い。しかし、エジプト旅行については充分な検討が行われていない。エジプト旅行について、もっともよく考察が行われているのは、『木下杢太郎画集第二巻』に付録された新田義之による「解説」である[8)]。エジプト旅行が契機となり、木下がヨーロッパ留学中に失っていた絵への興味を再度刺激された経緯が描かれているが、大変短い分析となっている[9)]。

3. エジプト旅行以前の東西文明に関する思想形成

木下の思想形成については、自身が多くの日記や随筆、紀行文、手紙を残しており、比較的経緯を追いやすい。木下の生涯における作風の変化は、主に 1916 年の中国・奉天の病院南満医学堂教授への赴任を境に、それ以前を耽美派詩人木下杢太郎の時代、それ以後を皮膚科教授太田正雄の時代として二分して議論されることが多い。これは荒涼とした中国奉天に赴任したことと、日本の文壇から遠ざかったことで、作風が修飾表現を多用するきらびやかな都会風な文体から、淡白な文体へと変化するためである。本節では、木下の文芸活動を「異国情趣」を作り上げた幼年期から東京での作家活動期、東洋文明に目が開かれる中国滞在期、西洋文明を体験し、失望を味わう欧米留学期の三期間に分けて考え、エジプト旅行直前までの思想形成について論じる。

3.1「異国情趣」と西洋文明への憧れ

木下の海外文化への関心は、幼少の頃から「異国情趣」として醸成されてきた。この生まれ持っての外国文化受容の素地については、彼の生まれた伊豆半島の伊東という土地の持つ「海国風土」が影響を与えたといわれている。木下杢太郎は本名太田正雄として、1885 年、伊東の開明的な米商「米惣」の太田惣五郎と母いとの間の三男四女の末子として生まれた。伊東という土地は江戸と大阪を結ぶ海上交通の要所にあり、都市の文化が直接に流入してくる土地柄であった。さらに太田家は開明的な商家であったために、姉たちは東京や横浜の女学校で教育を受け、毎夏、帰省した姉たちは薄暮の海岸で英語の歌を木下に歌って聞かせていたという。木下は後年、「予のエキゾチズムはこの時生れた。…歐羅巴文明への予感であった」[10] とその当時、次第に欧米化されていく日本の雰囲気を自身の思い出として語っている。

木下は東京に進学しても海外文化との接触の多い教育環境に身を置いた。1898 年、木下はドイツ語教育で知られる東京の独逸協会中学校に入学した。中学でドイツ語を学ぶのに加え、当時まだ新しい海外文化である小説や絵画に興味を持つようになっていった。この影響を受け、1903 年、美術学校への進学を希望するが、実家に反対されて第一高等学校（現・東京大学、以下、一高）への進学を余儀なくされた。一高では夏目漱石から英語を習い、『倫敦塔』などの翻訳文学にも触れている。

さらに木下の「異国情趣」は本格的な文芸活動の中で、より具体的な形を伴って花開いてゆくことになった。一高卒業後、ドイツ文学を専攻したいという希望があったが、再び実家に反対されて、1906 年、東京帝国大学医学部に入学した。しかし、ここでも木下は医学の授業を受けつつも、文芸活動を継続している。1907 年には与謝野鉄幹が主宰する新詩社の同人誌『明星』に投稿して、文壇入りを果たした。翌年初めて森鴎外に出会い、石川啄木と共に森主宰の観潮楼歌会にも顔を出すようになり、以降、生涯にわたって森に師事するようになった。

また当時、『明星』、その後の『スバル』の同人は、西洋商品が生活の中にまで浸透してくる大正時代の空気を吸って、数多くの西洋風の事物や飲食物、外国語などを作品の中に散りばめ、東京に漂う独特な「異国情趣」と「江戸風情」を充満させた詩を発表するようになっていった。当時の「スバルの青年たちは歐羅巴の文芸、歐羅巴の個人の自由といふものを渇仰の的」にして、「封建的の気分」に対する憎悪を持っていたと木下は述べており、当時、思いを同じくする同人たちが集っていたということができるであろう[11)]。1909 年には、新詩社を脱退した北原白秋らと一緒になって「パンの会」を結成し、セーヌ川に見立てた隅田川に近い西洋料理屋などにパリのサロンを模して集まり、芸術論をかわした[12)]（写真 2）。この会には後に高村光太郎、和辻哲郎、与謝野鉄幹、谷崎潤一郎、小山内薫など様々な分野の芸術家や知識人が参加した。木下はこの時に、のちに詩集『食後の唄』にまとめられる多くの耽美派の詩や戯作などの作品を発表していった。

写真 2：木村荘八『パンの会』(1928)
出典：岐阜県美術館寄託

しかし残念ながら、「パンの会」で開花した「異国情趣」溢れる耽美的な作品群の制作期間は長くはなかった。「パンの会」が次第に単なる遊興の会となってしまったというのもあるが、1912 年の東大医学部卒業と、続く東大医学部皮膚科教室での研究のなかで次第に停滞していった。

3.2 東洋文明との出会いと世界的視野の拡大

木下の人生にとっての第一の大きな転機となるのが、中国奉天への赴任である。1916 年 9 月、東京大学皮膚科教室教授土肥慶蔵の薦めによって、南満州鉄道会社が経営する中国奉天の南満州医学堂教授、兼奉天病院皮膚科部長に就職した。この中国・奉天への赴任によって、木下は東洋文明と芸術に開眼し、世界規模の視点から東洋文明のルーツを探究する随筆

文や美学評論、翻訳といったアカデミックな研究分野に活躍の場を移してゆくことになった。

一方で、中国行きは詩人としての「異国情趣」あふれる詩情を失う結果となってしまった。それは自身が認めるように奉天の環境が大きな影響を与えている。木下が初めて体験することになった現実の異国であった奉天は、情緒ある欧州の街並みではなく、「ラコーニック（簡素）」とたびたび木下自身が表現した荒涼とした街であった。奉天における木下の初期の生活は、不機嫌さと孤独に浸りつつ過ごしており、東京の様な情趣を探して、奉天の街中を彷徨ったという[13]。1916 年 10 月 17 日の和辻宛の書簡では「まだ何を始めていいかさつぱり見當がつかないで、たわいもなく日を過ごしてゐます」[14] と書き送っている。さらに 12 月 23 日の「満州通信 第四信」には次のように書いている。

> 朝になると外は一面の銀世界である。そして空は明快で、一色の瑠璃天蓋がれいろうたるものである。江戸的東京的に物哀れな連想など潜ませる余地がない。少なくとも自分は、奉天に来てから以来全くロマンチイクの気を無くした[15]。

このような陰鬱な生活の中で木下にとっての変化が訪れる。それは大陸の仏教美術との出会いから生まれた西域への憧憬であった。1917 年 2 月に北京に小旅行に行った際に中国絵画と陶器に出会い、それらを調べるなかでインド・中央アジアへのロマンティックな空想と情熱を引き出してきたのである。その転機については、1917 年 3 月 16 日「満州通信 第五信」において、斎藤茂吉に興奮ぎみに書き送っている。

> わたくしの頭は今支那西域に対する空想で一杯になつて居ます。二三年以内に――少くとも五六年以内に、一度、あのえらい玄奘三蔵が通つた道を通つて、北京から印度へ抜けて見たいといふ考えです。印度まで出られなければ、せめて西域諸国の遍歴だけでも可いと思ひます[16]。

この通信以降、中国・朝鮮仏教美術研究、翻訳、随筆を書き始めるようになる。この時期は特に中国西域に関する文献の翻訳を多く手掛けており、『ガンダーラ仏教美術研究』、オーレル・スタイン『Ruin of Desert Cathay（砂漠地キャセイの廃墟）』の翻訳をしている。これは木下にとって東洋文明の根源に至る道を模索する研究であったといえるだろう。さらにこの湧き上がる情熱は木下自身を中国・大同雲崗石窟、さらには朝鮮・高句麗古墳群のフィールド調査に駆り立てている。この調査は 1920 年 7 月に南満州医学堂教授の職を辞して、画家の木村荘八と共に行ったものであり、この時の記録は『雲崗日録』としてまとめられている。木下と木村が雲崗の石窟に潜り込み、その仏像の姿の中にガンダーラやササン朝ペルシャ、ギリシアの美術の影響を認めてゆく、生き生きとした記録となっている。

この中国や朝鮮での仏教美術の研究を通して、日本の仏教美術を東洋文明の末端として位置づけ、西域、ガンダーラ、中央アジアの美術への連関を知り、さらにギリシア・ローマ文化へと繋がる予感を実地から木下は感じ取っていった[17]。

> 若し古代仏像に印度的支那的日本的刻印の外に、多くの論者の説くやうに、希臘的影響が存するといふことが果して事実であるならば、実際すばらしいコムビナションではありませんか[18]。

以上のように、中国での生活は木下から都会的な耽美派の詩情を失わせることにはなったが、その一方で、日本や東洋の美術を世界規模の連環の中で考える眼を開かせた。北京の絵画や陶磁器の研究、雲崗石窟寺でのフィールド調査を通して、彼の想像力はユーラシア大陸を越え、西洋文明との接続を果たすのである。

3.3 現代西洋文明への失望と文明の源泉への興味

欧米への留学は、1921 年 5 月、岳父である河合浩藏の資金援助によって実現することになった。しかし、この欧米留学の日記の大半が異文化との接触の感動が感じられない内容となっている。ドナルド・キーンがこの日記の分析を行っているが、キーンは、「先立つ十数年間彼が付けていた日記に比べて、はるかに詳細だし、筆者の人柄も、もっともよく出ている。しかし、その時の彼は、年を取っていただけではなく、もう昔の感じ易さを失っていた」[19] と、中国滞在時に失った木下の詩情と木下のアメリカ近代社会への無感動を嘆いている。

日記を読むと、アメリカの途中で寄ったキューバの民族色豊かな生活は比較的、木下の執筆意欲を活発にしたものの、アメリカの印象は総じてあまり良いものではなく、美術館やカフェなどは「何かわざとらしい一異物」として切り捨てている[20]。しかし、注目すべきは、アメリカで印象に残ったものとして、ニューヨークのメトロポリタン博物館でのエジプト美術との邂逅を挙げている点であり、その後のエジプトへの訪問が暗示される。木下にとっての関心は、アメリカで見られる近代科学技術や西洋文明の模倣ではなく、中国文明の研究で探究した文明の源泉なのである。アメリカの日記においても、エジプトと中国の芸術について熱っぽく語られている。

> わたくしは亞米利加殊に紐育の博物館に於て埃及藝術に親炙するを得ました。是れは（藝術としては）甚しく買被る必要はないものですが、兎に角わたくしには珍らしいものでした。それ等の關係から、船中ではわたくしは支那文明と埃及文明との關係、漢人種又日本人種の起源、沿革等に就て空想しました。（一九二一年九月二十日）[21]

このアメリカでのエジプト芸術との出会いの感動を、木村荘八にもエジプト美術の絵葉書と共に伝えている。木下はこの当時からエジプトを東西両文明の源泉とする思考を温めていたと思われる[22]。それに対して、木村は1921年11月15日の木下宛書簡で以下のように返信している。

> 君がエヂプトを殆ど支那へかけての大道のオリジンと認めてゐるらしい傾向は、ハガキを通じて、少くもその氣は作品から、わかる。過日關野さんの室で見た印度の初期の作品など實にエヂプトによく似てゐた。僕は、その味を古典の品格と思ってゐる。（で、ギリシヤにもあり、龍門にもあるだらう、およそ素描の正しい形美健康の作には）。グプタのものなどには、それはなく稍作者味（個性と云ふか）になりすぎてゐると思ふ。唐も概してさうだ。支那味だ。君がそつちで恣まゝエヂプトやグリークの品格に觸れてゐる日を羨望に思ふ。充分一レツシングとなつて慨世のへつぽこモダーニズムに拘る時勢に美の中の支柱となつてくれる様切望する。二科、帝展…凡て、實にひどい[23]。

続けてアメリカからロンドン、パリに移り、医学研究を継続するのであるが、初めて訪れるヨーロッパに対する木下の感動はあまり伝わってこない。木下は国情を冷静に分析しており、現代的な産業や習俗の中に、西洋文明の源泉につながるものが見いだせないことに失望している。1922年11月13日の書簡には、現代ヨーロッパへの失望を次のように書き表している。

> 青年時代に私が憧憬した歐羅巴は、現に今私が見てゐるやうなものではなかつた。學校を出た時數年間の不得意な生活の間に、私が夜毎宿直の室で空想して、どうにかしてありつくことが出來たら、そしてけちくさい日本から遠離することの出來ると思つた處は、もつと絢爛で、もつと高雅で、もつと生々としたところであつた。そこから私は生の泉を酌むことが出來るだろうと想像した。丁度往昔九州諸藩の使者たちが羅馬へ行つた時のやうなそんな處であるだらうと思つたのであつた[24]。

木下が幼少の頃より持っていた「異国情緒」は、皮肉にも実際に欧米を訪問することで潰えたのである。しかし、木下はヨーロッパを去らず、医学留学のほとんどをフランスに滞在している。その中で現代ヨーロッパ文化への失望はあるものの、フランスに残る過去のラテン・ギリシア文明の残り香について関心があったことが記述されている。

> 現在の佛フランス文明には感心出來ない。然しここでは希臘・羅馬正系の傳統を研究することが出來る。英吉利の文明は商人の文明で、ブリチシュ・ミユゼヤムに行っても、埃及、印度等から盗んで來たものものゝ外には英國産としては碌なものはない。英国は

醫学はだめで、ただ東洋學の研究には便利である。英國の文明に比すれは國は弱いが仏蘭西もものもの上である[25]。

さらに 17 日には、フランスのパリから木下は和辻哲郎に一つの空想を書簡に書き送っている。

僕が毎日毎日少しづつ考へてゐる空想について。日本では支那の論理的精神に段々とさよならをしつつあるのではないでせうか。そしたら日本の論理と云ふものは主としてカント以後の哲學的倫理學が基礎になるのでせう（？） 人間の論理の源泉は純理性的で十分でせうか。もつと實例から得る感情的感化を必要としないでせうか。十八世紀以後の西洋文明の輸入だけで、漢學を捨てたことに代わるのでせうか（きかい的文明は別のこと）日本でもその精神的文化を形造る爲めに、泰西のもつと古い源泉から水を直接に入れる必要はないでせうか。これは僕のもうらうとして考へてゐることです。専門家でないから明に説明することは出來ませんが[26]。

木下は和辻に日本のために西洋（泰西）の根源ともいうべき「もつと古い源泉から水を直接に入れる必要」があることを説いている。源泉とはパリで研究を行っている時点においては、ギリシア・ローマのラテン文明が中心ではあるが、さらにさかのぼるならば、エジプト文明も視野に入ってくるであろう。「もっと古い源泉へ」と向かう意思が、パリに滞在する木下の研究を支えていたのである。

4. 木下杢太郎のエジプト旅行

それではいよいよエジプト旅行における木下の足取りを資料から追ってみたい。木下はエジプト旅行については、1923 年 1 月 14 日から 2 月 3 日までの滞在地のみを記載した簡単な記録を残している[27]。また旅行の詳細について、大阪朝日新聞の依頼でパリに戻って書いたエジプト滞在記『テエベス・百門の都』がある。エジプト滞在時の写真数葉が残っており、現在、神奈川県立文学館の木下杢太郎文庫に収蔵されている（写真 3）。写真には、日本人参加者は 9 名、エジプト人案内者 1 名が映っており、左から小林古径、原末子、金子まさ子、阿部次郎、案内者サリー、原商会社員中根書記、木下杢太郎、前田青邨、原善一郎、兒島喜久雄である。

原善一郎は、明治大正期に芸術家のパトロンとして活躍した原三渓の長男である。原三渓が日本画家に対して支援を行った一方で、善一郎は西洋絵画への造詣が深く、洋画家への支援を行った。当時欧州支店の事業拡大のために訪欧していた折に、阿部が計画していたエジプト訪問に参加することを決め、妻の末子、司書の中根と欧州留学していたピアニストの金子まさ子を随伴した。また小林古径、前田青邨は日本画家であり、原三渓からの支援を受

写真 3：1923 年 1 月 19 日 ギザのピラミッド見学
出典：県立神奈川近代文学館所蔵

け、欧州訪問に同行していた。しかし、このエジプト訪問に際して原は体調に懸念があったことから、医師であった木下が誘われた。さらに木下は当時パリで一緒に行動していた美学者兒島喜久雄を引き入れて参加した。

この中で阿部次郎は大正教養主義を代表する哲学者であり、日本帰国後に東北大学において木下と同僚として働くことになる。阿部次郎とは東京帝国大学時代に、和辻を介して知り合っていたものと思われ、南満州赴任時にも阿部が木下を訪問するなど、時おり交際があった[28]。阿部はエジプト滞在時の日記原文を残していないが、およそ 10 年後となる 1934 年に「埃及訪古記」、「カイロ附近」、「テーベの古都」の三作品として、日記の主要部分のみを整理し、随筆として発表している[29]。

木下のエジプト観光の旅程を資料から整理すると、以下の表のように再現できる（表 1）。

エジプト旅行 1923 年 1 月 18 日 –2 月 6 日？
1 月 14 日　イタリア・ナポリ（グランドホテル・サンタルチア泊）をイギリス船オルモンド号で出航
1 月 18 日　ポート・サイド―カイロ（コンティネンタル・ホテル泊）
1 月 19 日　カイロ―ギザ（ミーナ・ハウス・ホテル – ギザ・ピラミッド群）―カイロ（カイロ滞在中：コンティネンタル・ホテル泊）
1 月 20–25 日　カイロ市内・美術館
1 月 26 日　メンフィスとサッカラ・ピラミッド群
1 月 27 日　カイロ市内・美術館
1 月 28 日　午前美術館、午後オールドカイロ（コプト教会・コプト美術館・死の都）（アテネで疫病流行の報。ナポリ行きへ変更。出航までルクソール旅行をすることに。）

1月29日	カイロ市内・美術館
1月30日	植物園―ルクソール行きの夜行列車（車中泊）
1月31日	午前9時　ルクソール駅到着―ナイル河岸散策・写生―昼食後、ルクソール神殿―夕食後、船でカルナック宮殿へ―船でホテルへ （ルクソール滞在中：サヲイ・ホテル泊）
2月1日	船でルクソール神殿―古テーベ陵墓（セトス一世宮）―帝陵の渓（王家の谷：アメノフィス二世陵、セトス一世陵、ラムセス四世陵）―ハトシェプスト女王葬祭殿―メムノンの柱―ラムセス2世王廟
2月2日	カルナック神殿―ルクソール駅―カイロへ
2月3日	カイロからアレキサンドリアのグレコ・ローマン博物館へ （出航延期により数日、アレキサンドリアに滞在）
2月6日頃か？	アレキサンドリアから出航、ナポリへ。

表1：資料より再現した木下杢太郎のエジプト旅行の旅程[30)]

木下によると、当初の計画ではカイロ見学後、アレキサンドリアからギリシア・アテネへ向かうはずだった[31)]。しかし、アテネで疫病が発生したために渡航を中止し、その空いた時間で古くはテーベと呼ばれた上エジプトのルクソールに向かうことになった。

> 耳目の直觀で些しく古埃及を了解したのち、直に希臘の現場に到つて、その異つた古文化の生活域（アクロポリス、オリンピヤ）に身を以て打つかることが出來たら、文明史又美術史の讀み方の之より良い方法は無い筈である。幸ひ我我に此理想的方法が成就しそうになつた時に、偶然の事件が忽ちにそれを畫餅に屬せしめた[32)]。

このように当初の目的は、エジプト文明―ギリシア・ローマ文明―ヨーロッパ文明という、文明史・美術史の伝播の流れに沿った旅行を行うというものであった。しかし、この旅程の変更によってより古い時代に属する上エジプトに旅ができたことは、文明の源泉を求める木下にとって大いに喜ばしいことであった。そのために木下の随筆『テエベス・百門の都』は、ほとんどがこのルクソールの出来事を記載している。また木下はエジプトを旅行するにあたり、フランス語版ベデガー社出版のエジプトガイドブックを持って行ったと推測される。このガイドブックは神奈川県文学館の木下杢太郎文庫に収蔵されており、本調査の際にカイロ市内の地図の中にギザのメナホテル前で撮影した木下杢太郎の写真が挟み込まれているのを発見した。このガイドブックには、エジプト王の系譜図とルクソール関連のページに顕著な使用痕があって、黄変しており、木下が作品の執筆の際に使用したものと思われる[33)]。

5. 阿部次郎のエジプト経験との対比

それでは木下杢太郎のエジプト経験を『テエベス・百門の都』を用い、阿部の随筆と比較

しながら論じてゆく。木下と阿部は滞在中に行動を共にし、意見を交わしていたがゆえに随所に類似した見解を提示しているところもあるが、木下は阿部とは基本的に執筆における問題意識やアプローチに違いがあり、語り方が異なっている。

木下の『テエベス・百門の都』は二つの眼によって記述されている。一つは医師太田正雄としての眼である。エジプトの風俗や歌、会話、街の様子を詳細に観察し、人々のしぐさや行動目的、事物の形状と使用法を非常に冷静に記述している。もう一方は詩人木下杢太郎としての眼であり、同じ事物を見つめつつ、エジプトの叙情を詩的想像力で感受している。

まずルクソール到着時の描写を見ると、木下はエジプト文明がナイル河の生み出した文明であることを強調するために、ナイル河岸の風景を中心にストーリーを展開している。その中で二つの視点の交錯を見ることができる。

> 門を出ると直ぐ岸に出る。壯漢があつて、禾稈を以て作り、南京珠で飾つた拂子（ほつす）を賣る。是れ此地方の蠅の多きを語るのである。極めて拙劣に模作した陶製の甲蟲（スカラベ）などを押賣しようとする。ナイルの岸は五六人の人の背丈を併せたほどの高さの斷崖をなし、椰子の樹を密生せしめる。
>
> 處處に石段があつて水汲みに、衣を洗ひに下るやうにしてある。丁度日がやや高く、はたらき盛りの時刻であつたから、磴下の水汲場には人が集まつてゐた。水を汲むには壺を用ゐることが少い。壺は唯少量の水を滿たすに過ぎず、且運搬が不便であるから、多くは少女の爲めの用具である。彼等は之を頭上に載せてゆく。壯年の者が大量の水を汲むには、豚の皮の囊を以てする。豚皮を殆どその形の如く縫合せ、頸に當る孔から水を滿たし縄を以て其口を鎖して、背に負うて昇るのである。（希臘古彫刻にバコスの此種の酒囊に椅つて狂態を演ずるものがある。）[34]

木下の二つの眼には、ルクソールの人々の日常生活の様子を客観的に記述しながらも、その情景から古代ギリシア文明と繋がる要素を見出そうとする想像力がみられる。このギリシアとの連環を見い出そうとする見方は、阿部の随筆においても確認できる。阿部はカイロ市内の建築物のデザインからギリシア・ローマとの関連性を見出そうとした[35]。おそらくエジプトにおいて阿部と木下は、文明史、美学についてさまざまな意見交流があったのであろう。

さらにエジプト芸術を見る姿勢においても類似点がある。阿部はエジプトの風土と日常生活に身をおいてエジプト芸術を見ることによって、その土地に相応しいリアリティが理解できると論じている。

> このアフリカの沙漠の端に於いては、裸体は自然の礼服と見え、数千年動かじと腰を据ゑたスフィンクスは、限りなき流砂の間に生息するにふさはしい生物と見えるのであ

る。所謂東洋的な、憂鬱な、神秘的な、空想的な、幽冥玄怪的な浪漫趣味を離れて――寧ろ彼らの子孫にさういうものが産れ出ることを予想することなく、これに先つて成れるものとして――明かに、勁く、現実的に、埃及の空に輝る太陽のやうな力を以て自明の存在を主張する[36]。

これに関して木下もまた、カイロ郊外のサッカラの墳墓を見てから、カイロ博物館の展示物を俄然として生命力のある美術品として理解することができるようになったことを供述している。そして阿部と同様に、エジプト美術をエジプトの風土の中で見ることを読者に薦める。

カイロの博物館は世界で有數の博物館に相違ないが、博物館の死灰の如く冷い雰圍氣の裡では良い藝術品も往往其命を失ふ。二三日前にサツカラに往き、地中に埋まつた墳墓を見た時、我我の頭に古の埃及と云ふものが始めて有機體的の形を作り出した。サツカラを見て後再び博物館内の有象を視ると、既に彼等は其面目を一新してゐた[37]。

しかし、木下はさらにエジプトの芸術が、彼らの生活環境を忠実に模倣した結果、生まれたものであることを理解したうえで、古代エジプト人たちの具象的な鋭い観察眼に注目している。

博物館の蒐集品の裡に、又カルナツクの墳墓の壁の浮彫に、多數の船舶の模型又は浮彫がある。古埃及の文明はナイル河の文明である。一つの大河に由來するものとしては黄河や長江の文明よりもつと純粹のものである。船舶圖の多いのは怪しむに足らぬ。外物の形象に對しては鋭い觀察眼を持つてゐた古埃及人が、其文明の一象徴たる船舶を精密に、且、藝術的味覺を以つて模倣したものが是等の圖象である[38]。

この事物の精密な模倣という特性は、木下の美術研究においては非常に重要であり、美術の古代性を意味している。木下は日本の天平文化の仏像が朝鮮、中国、ガンダーラ、ギリシアの中でその源泉に向かうほどに外界の事物からの具体性が増し、写実的になっていくことを理論として採用している。そのために木下は、エジプト美術の具象性を「黄河や長江の文明よりもつと純粹のもの」として感得しているのである。

次に対象へのアプローチについて、阿部と木下との間には大きな違いがある。阿部は対象を内省的に捉えて、現地の人々や事物についての記述はするが、直接的な接触をあまり持とうとしない[39]。その一方で、木下は美術だけではなく、古代につながるエジプトの習俗や思想に肉薄しようと試みるのである。この木下の態度は、中国での著作の中にすでに見られ、木下が著した『雲崗日録』『支那南北記』には、現地の人々と親しく付き合っている様子が

描かれている。さらにエジプトにおける習俗の精緻な描写は、木下の詩情と想像力によって古代エジプト世界を再現するまでに至っている。

> この靜けさと此背景とこの水音とは、幻想的に嘗て博物館で見た柩を送る船の薤露を挿入する恰好の情緻であった。柩は喪布で卷かれた屍の形をする。頭部には金箔を置いた假面をはめる。眼大きく、瞼には幅廣く墨を塗り、鼻隆く、顎圓く、厚い唇は生者よりももつと生生として美しく見える。鬘の毛は肩まで垂れる。頤に髭なく、柩の首尾兩側にはイジス及びネフチス兩神の畫像を描く。胸のあたりには、首と肢とを闕き日輪を胴とする大鳥の兩翼を張るものが卷かれてある。是れ日と天空とを表すものである。死者の靈の陰府に臻る時惡鬼のこれを害ふを防ぐものである。胸部の側面には兩眼の並び存する圖象を描く。是れ死者の眼である。然し後に天の眼となつたものである。右眼は日、左眼は月である。同じく是れ死者の靈を護るものである。帶狀に柩を卷く細き區劃には色彩を以て象形文字が書かれる。是れ死者の名と死者の靈を衞る諸神の名とを誌すものである。
>
> 柩は船の央の臺上に安置せられる。頭は船首に向ふ。僧は供物をし、家族はその廻りに泣く。漕者數名、船尾に近く坐して靜かに船をやる[40]。

一方で、阿部の記述は、エジプト旅行中に出会ったエジプト人と西洋人との関係から、西洋諸国の専横に対抗する意見へと発展させ、日本・アジアのナショナリズムを高め、世界文明への寄与を望む論調となってゆく[41]。しかし、木下からは、そのような東西文明の対立の論調を見ることはできない。わずかにカルナック神殿と王家の谷で外国人観光客の姿を当り障りなく描写する程度である。

> 已に幾組かの男女の旅客が居て、卷舌の英語と通辯の英語とが相混じて、世界到る處に聽かれる特殊の生活感情を展開してゐる[42]。

> 我我が諸王陵に達した時、ちやうど近頃新に發掘を始めて評判になつてゐるツウタンカモンの古墳の入口（といつても井の如く深く掘り下げられてゐる處であつたが）のいはば井桁のやうに高くなつた周縁のところに人人が大勢集まつてゐた。それは主として亞米利加からの觀光客であつた。〔中略〕して見ると、工事に關係ある人の妻女でもあるか、身輕な服裝にゲエトルを穿ち、卷煙草を挾む指を氣取つた風に長く延ばして立つてゐた〔中略〕後で聞くと此等の事は活動寫眞のために再現せられたもので、わたくしも亦嘗て新聞の寫眞に既にこの木馬には見覺えがあつた[43]。

木下のエジプトにおける西洋人の描写はこの二カ所であり、阿部が記述するような植民地

支配に対する政治的な視点を描写の中には仮託せず、むしろ可能な限りエスノセンティズムを排して、自分と変わらぬ人々として描写している。

この二人の記述の違いを生み出した要因の一つは、執筆目的と時期が異なったことにも一因があるだろう。木下の『テエベス・百門の都』はエジプト訪問の直後に執筆し、1923 年 6 月 21 日から 27 日まで大阪朝日新聞に掲載する目的で書かれたものである。一方で、阿部の随筆はエジプト訪問から、数年後、世界大戦へと向かうなかで、自らの旅行記やガイドブックを再度参照しながら執筆したものであり、政治的な意図を組み込んだ記述となっている。

6. 東西文明の源泉の希求：オリジナリティの問題

木下は、エジプト訪問を世界文明を客観的に見つめる歴史的遠近法を成熟させたターニングポイントとして見做している。このエジプト旅行の意義について、友人の木村荘八への 1923 年 2 月 10 日付の書簡で以下のように語っている。

> 埃及は僕の全く豫期しなかった収穫であつた。若し H 氏[44] が僕を其旅行に促さなかつたら、僕には永久に未知の國土として終わつたらう。少くとも、ちらちらと、少し光る星の見える雨季の空ぐらゐの暗さで終つてしまつたらう。僕は亜米利加の、殊に紐育の博物館で後にまた倫敦及巴里で、埃及のすばらしいものを大分見た。然し唯珍らしい、不思議なものとして看過したのに過ぎなかつた。埃及文明史は餘り日本に紹介せられて居ないし、僕自身もそれを閑却してゐたから、其文明は唯舊い丈だとしか掴んでゐなかつた。處が實際は大ちがひ、此文明は此地球の開明になつた根本的の土臺で、今に傳はる其遺物だけでも、單に考古癖からでなく、現代の生活を豊富にするものである。世界の公民として考へて見ると實際日本にある盡くの建築物がなくなつたつて、埃及の今迄知られた丈のものが無くなつたのに比べて見ると何でもない。
>
> 僕も段々と世界文明の歴史の遠近法を見ることにも慣れて來た。特殊の鄕土的親しみの感情をば過重しないことが出來るやうになつた。日本の文化及び藝術の系統は支流に見える[45]。

木下の歴史的遠近法はまず本流と支流を見定めることにある。そのために「特殊の鄕土的親しみの感情」を捨てる必要があると述べている。これは客観的分析のために、日本の文化や芸術を中国文明の支流として見做す覚悟を示している。また世界文明の本流には二つの流れがあると措定している。東洋文明と西洋文明である。東洋文明は、中国・インドといった仏教文明である。朝鮮や日本の文化はこの流れの支流として見做されるべきものであるとする。しかし、この本流である中国やインドは「今は不毛な原を流れる大河」[46] になってしまったと木下はいう。他方、西洋文明は、フランス、イギリス、ドイツといったヨーロッパの

諸国の文化を支流とみなし、本流にはラテン・ギリシア文明があることを見出している。

この基礎から木下は支流にある日本の役割を論じている。木下は世界における日本の立ち位置に関して、自文化中心主義を排した客観的で、コスモポリタン的な見方を主張する。日本の役割は独力で急激に再生させるのではなく、西洋文明から習得した知識と見識で、東洋文明を蘇生することにあると看破する。その際には、中国の人文知識を捨て去ることではなく、それを西洋的な方法論から再度研究し直すことが重要であるという。

この問題について、木下は欧州・エジプトから日本に帰国した後、1925 年 7 月 29 日名古屋銀行倶楽部晩餐会において行われた講演「日本文明の未來」において端的に表明している。まず木下は日本の文化は、東西両文明の混交によって形成されていると論じる。

> さて從來我々の文明の淵源であつたものは何かと尋ぬると、第一は支那の文明、第二は印度の文明、それに第三はヨオロツパの文明が加はつたものであります。是等のものが今まではどう云ふ取り合せになつて居たか。また未來はそれをどう云ふ風に組合はせねばならぬか。斯う云ふことを考へるのは、專門家にばかり任せて安心してゐるべきではありません〔後略〕[47]

日本は明治以前までは文明の淵源として特に中国の文明の影響を大きく受けて発展し、それは漢字を介して、文明の精神の深い理解にまで及んでいた。そのため日本の文化の中には、中国文明の源泉たる精神文化をも受け入れる事ができたという。

しかし、その一方で西洋文明を受け入れる際には、その実利的な側面を急いで受け入れてしまったために、その源泉たる精神文化に直接に触れて受容することはなかった。木下によると西洋文明の受容は模倣に過ぎなかったという。

> よく日本人は西洋人から猿だと云はれます。謂ふのは何んでもかでも人の眞似ばかりして獨創性のないのを誇張して嘲つたのであります。成程日本は六十年の間にあわてて西洋の文明を取り入れました。それには猿真似も止むを得ないのであります。然しこの傾向は今に至るまで止みません[48]。

木下によると、日本は西洋文化をただ受け入れるだけで、その文明の思想的源泉に触れることはしてこなかった。しかし、日本が新たな独自の文明を生み出すためには、直接現地の文字を読み、目にし、その文明の源泉の精神文化をじっくりと研究することが重要であるという。

> 我々は未來に於て日本の獨創の文明と云ふものを建設したいのであります。所が獨創といふものは、決して無から生ずる所の有ではないのであります。既存のものから導き出

すべきものであります。

その爲にはどう云ふ手段を取るべきかと云ふと、それは文明の源泉の研究に力を盡くすより外の方法はないのであります[49]。

日本において独創的な文明を形成するためには、文明の源泉に触れ、その研究を行うことによってのみ達成される。エジプトへの旅を踏まえ、木下は文明の源泉を理解するためには、その文明の始まりから遡って理解する必要があるとして、文明の源泉へのつながりを世界地図の上に配置して考えることを提案している。

我々は歐米に渡るとき、若しいきなりアメリカに行くとシヤトルなり、サンフランシスコなりに着いてまづ吃驚する。或はフランスへ行くとマルセイユで吃驚する。パリイへ行つてまた吃驚する。夫れに反して若し先づポオトサイドで船を降りてカイロに行き、その附近の古蹟を尋ね、更にナイル河をルクソオルあたりまで遡つて、埃及古代の文明に親炙し、それからアレキサンドリヤあたりから再び乗船して、ギリシヤに行き、デルフイ、アテン、オリンピア等を歴訪して、希臘盛代の文明をしのび、そこを出て、海路シシリイ島に入り、それから伊太利を北へと旅行して各地の古都を尋ね、そしてパリイなり、ロンドンなりに行くと、もうこつちの腹が出來てゐるから少しも驚かない[50]。

文明を理解するためには、地球を西廻りでいくのではなく、東回りでエジプト、ギリシアを経由して、歴史の流れに沿ってヨーロッパに入ることを勧める。そうすることによって西洋文明の源泉を理解することで西洋文明に驚くことはなくなり、中国文明の源泉を知っている我々と対等のものとして理解できると主張するのである。ここで紹介されているルートは木下が通過した二つのルートを述べている。一つ目の間違ったルートとして紹介されているのは、まさに木下がヨーロッパに初めて向かった際に通った西廻りのルートである。木下にとって模倣にあふれた無感動の旅であった。二つ目の正しいルートは、エジプト旅行後にヨーロッパに戻る際に企画した文明の伝播に沿ったルートである。エジプトの地を踏むことによって、西洋文明の流れを理解し、我々が東洋文明を理解するのと同様に、順を追って理解することが可能になるという。木下はエジプトの旅自体を西洋文明の源泉を理解するための起点として解釈しているのである。

そして、その文明の源泉につながるためには効率性（エフィシェンシー）を求めない研究が必要であると説いている。

我々が反省すべき事は何であるかと云ふと、人間の問題は甚だ複雜であるから、唯學問なり、仕事なりの上のエフイシエンシイと云ふものゝみを唯一の標準とする譯には行かないと云ふ事であります。道德、情操の事も、物質的事業と同様に人世の重要なる要素

であるのであります。功利主義的臭味の多いエフイシエンシイの増加のみを目的とした文明には、人性の堕落を來たす傾向が全く無いとはいはれません[51]。

木下によると効率性に基づいた文化の吸収は、必ずしも幸福な文明を約束するものではない。むしろ源泉となる文明の持つ豊かな精神性を失い、ヨーロッパ文明の植民地となると主張する[52]。しかし、翻って考えると、来るべき日本文明のために両文明の源泉を求めるのに日本は非常に有利な地位にあると木下は分析する。

若し日本人が最近五六十年以來の歐米文明を吸収するのみならず、その既往に遡つて、前述の諸文明の源泉について榮養を吸收しそして之を自家の氣質に由つてモヂファイするならば、もうそれは立派な獨創であつて、決して猿眞似ではないのであります。殊に我々は歐米人と異ひ、東洋の文化をも味わうことが出來るといふ強味があります[53]。

以上のことから、木下はオリジナリティを持つ日本文明の創設のために、東西両文明の源泉に至る研究を進めるべきであると主張した。明治維新以降、日本は特に西洋文明を急速に取り入れてきたがそれは実用面だけの「猿真似」に過ぎず、自らが文化を生み出す原動力となっていなかった。今後日本が世界に寄与する文明としてしてなりゆくためには、東西文明の両方の影響を受けているという好立地を活用することが重要であるという。両文明の源泉であるエジプトを起点として全世界的な流れを把握し、そこから東西文明の文化精神を効率性のみにとらわれず、じっくりと理解することによって日本文明のオリジナリティを生み出してゆく必要があるのである。

7. おわりに：日本文明の未来へ

木下のエジプトへの旅は、東西文明の源泉の理解に至るための旅であった。木下の東西文明観はギリシアにおいて交差し、さらにエジプトで源泉にたどり着く。それゆえにエジプトにおける彼の観察は、阿部の日本・アジアから西洋諸国に対抗しようとする傾向とは異なり、東西両文明の源泉の探究として、コスモポリタン的視点において古代エジプトの精神とその残留としてのエジプト人の習俗に対する客観的な関心を向けている。

また木下の思索において、エジプトは世界文明の連環の中心であった。木下は日本・中国・韓国における東洋美術研究から、西域、ガンダーラ、ペルシャを通過し、ギリシアからエジプトへとつながる東洋文明発展のルートを見い出していた。さらにエジプト訪問後は、エジプト文明、ギリシア文明から、大航海時代にはスペイン、ポルトガルを、明治期からはドイツやイギリスを経由し、南回りで海を越えて、日本へと向かう西洋文明移入のルートを探究していった。

両文明の源泉たるエジプトへの旅の果てに、木下は両文明の支流の到達点としての日本が

オリジナリティをもった世界文明として成長していくためには、源泉を探究することが必要との発想に到達した。明治時代から続く効率性をのみを求めて西洋文明をただ受け入れていく姿勢は、日本が世界文明の支流にあり続けることを意味し、植民地化に至る道であると木下は説く。困難な道ではあるが、両文明の源泉を深く理解することによって、東西文明の本流の中で世界文明に寄与するオリジナリティを生み出すことができるのである。

註

1) 太田正雄『木下杢太郎日記　第三巻』岩波書店、1981 年。
2) 杉山二郎『木下杢太郎――ユマニテの系譜――』平凡社、1974 年。
3) 野田宇太郎『木下杢太郎の生涯と藝術』平凡社、1980 年。
4) 加藤周一「木下杢太郎の方法」『加藤周一自選集 1　1937–1954』岩波書店、2009 年、195–211 頁；加藤、「木下杢太郎とシナの医学」同上、220–225 頁；加藤「鴎外・茂吉・杢太郎」『加藤周一自選集 9　1994–1998』岩波書店、2010 年、35–137 頁。
5) 岩阪恵子『わたしの木下杢太郎』講談社、2015 年。
6) キーン，ドナルド「木下杢太郎日記」『続　百代の過客：日記にみる日本人（下）』朝日新聞社、1988 年；福田秀一「木下杢太郎（太田正雄）「欧米日記」の成立―文人学者の留学日記　大正篇二―」『国際基督教大学学報　Ⅲ-A　アジア文化研究』第 24 号、（1998 年 3 月）、1–18 頁；福田「木下杢太郎（太田正雄）の留学日記」『国際基督教大学学報　Ⅲ-A　アジア文化研究』第 25 号、（1999 年 3 月）、1–18 頁。
7) 菅原潤『旅する木下杢太郎／太田正雄――グローバル時代の二足の草鞋――』晃洋書房、2016 年。
8) 新田義之「解説」『木下杢太郎画集　第二巻　紀行篇』用美社、1985 年、185–193 頁。
9) 同上。
10) 杉山、前掲書、22 頁。
11) 同上、78 頁。
12) 太田、「パンの会の回想」『木下杢太郎全集　第十三巻』岩波書店、1982 年、156–164 頁。
13) 杉山、前掲書、147 頁；太田、『木下杢太郎全集　第二十三巻』岩波書店、1983 年、157 頁。
14) 太田、前掲書『木下杢太郎全集　第二十三巻』、159 頁。
15) 杉山、前掲書、144 頁。
16) 同上、163 頁。
17) 木下は奉天清眞北寺のムスリムの児童たちの頭に日本と中国北部にしかない白雲 (Microsporum ferrugineum) がみられることを根拠に、医学的に過去の民族間交流の存在を想像している点は興味深い（太田、「奉天に於ける回回教の寺院」『木下杢太郎全集　第十巻』岩波書店、1981 年、217 頁）。
18) 太田、「故国」、同上、176 頁。
19) キーン，前掲書、281 頁。
20) 太田、「倫敦通信」『木下杢太郎全集　第十一巻』岩波書店、1982 年、356 頁。
21) 同上、354 頁。
22) 太田が木村に書き送ったはがきの本文は見つかっていないが、木村による 1921 年 11 月 15 日の

木下宛書簡の中に、太田がはがきを書き送ったことが記載されている。

23) 岩波書店編集部、『木下杢太郎宛知友書簡集　上巻』岩波書店、1984 年、322 頁

24) 太田、「歐米日記　三　大正十一年」『木下杢太郎日記　第二巻』岩波書店、1980 年、396 頁。

25) 太田、前掲書『木下杢太郎全集　第二十三巻』、243 頁。

26) 同上、271 頁。

27) 太田、「歐米日記　三　大正十二年―大正十三年」、前掲書『木下杢太郎日記　第二巻』、400 頁。

28) 奉天滞在時、1920 年 4 月 29–30 日に阿部次郎と満州で会っている（太田、「大正九年日記」、前掲書『木下杢太郎日記　第二巻』、184 頁）。

29) 福田秀一「阿部次郎の留学日記」『国際基督教大学学報　Ⅲ-A　アジア文化研究別冊』、第 7 号、（1997 年 3 月）、65–83 頁。

30) 阿部、「埃及訪古記」『秋窓記』岩波書店、1937 年、192–214 頁；阿部、「カイロ附近」『秋窓記』岩波書店、1937 年、215–243 頁；阿部「テーベの古都」『秋窓記』岩波書店、1937 年、244–282 頁；太田、前掲書「歐米日記　三　大正十二年―大正十三年」；太田、前掲書『木下杢太郎全集第二十三巻』；西田昌之「屈折するオリエンタリズム：大正期の阿部次郎のエジプト観光から」カイロ大学文学部日本研究センター国際シンポジウム『明治以降の日本の経験から学ぶ―明治 150 周年を迎えて―』プロシーディング、2018 年 9 月 23 日、カイロ大学文学部日本研究センター；福田、前掲書「阿部次郎の留学日記」、65–83 頁。

31) 太田、前掲書『木下杢太郎全集　第二十三巻』、275–276 頁。

32) 太田、「テエベス・百門の都」前掲書『木下杢太郎全集　第十一巻』、409 頁。

33) 阿部もまたベデガー社のエジプトガイドの記事を著作に利用しており、日記の中に旅行記執筆の前にベデガーを読んだとの記載が見える。おそらくはドイツ語版のベデガー・ガイドブックを使用していたものと思われる。当時、エジプトの旅行ガイドとしては、ベデガー社とクック社が出版していた。日本語のエジプトガイドは南部兄弟商会の南部憲一が 1925 年に日本郵船株式会社から『埃及見物』を発行している（山中由里子、「スエズの商人・南部憲一」橋本順光・鈴木禎宏編『欧州航路の文化史：寄港地を読み解く』青弓社、139–158 頁）。しかし、阿部も、木下もこの日本語版ガイドブックを利用した形跡はない。

34) 太田、前掲書「テエベス・百門の都」、412–413 頁。

35) 西田、前掲書。

36) 阿部、前掲書「カイロ附近」、218 頁。

37) 太田、前掲書「テエベス・百門の都」、409 頁。

38) 同上、410–411 頁。

39) 西田、前掲書。

40) 太田、前掲書「テエベス・百門の都」、419 頁。

41) 西田、前掲書。

42) 太田、前掲書「テエベス・百門の都」、420–421 頁。

43) 同上、426 頁。

44) H 氏とは原善一郎のこと。

45) 太田、「埃及旅行の後に」『木下杢太郎全集　第十二巻』岩波書店、1982 年、9–10 頁。

46) 同上、14 頁。

47) 太田、「日本文明の未来」前掲書『木下杢太郎全集　第十二巻』、289 頁。

48) 同上、309–310 頁。

49)　同上、309 頁。

50)　同上、310–311 頁。

51)　同上、286–287 頁。

52)　太田、前掲書「埃及旅行の後に」、16 頁。

53)　太田、前掲書「日本文明の未来」、311 頁。